Short ショートコメント ★★★

コロニアの子供たち

2021 年／チリ・フランス・ドイツ・アルゼンチン・コロンビア映画
配給：シノニム、エクストリーム／99 分

2023（令和 5）年 6 月 15 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－７２

監督・脚本：マティアス・ロハス・バレンシア
出演：サルヴァドール・インスンザ／ハンス・ジシュラー／アマリア・カッシャイ／ノア・ヴェスターマイヤー／ダヴィド・ガエテ

みどころ

１９７０年に起きた、チリでのアジェンデ人民連合政府の樹立は、学生運動実践中の私には“快挙”だった。しかし、１９７３年９月の軍事クーデターでそれを倒したピノチェト軍事政権は、以降どんな政権運営を？“コロニア・ディグニダ”って一体ナニ？なぜそこが残党ナチスの巣窟に？極秘要塞に？

そんな驚愕の実態を、エマ・ワトソンの主演で描いた問題提起作が『コロニア』（１５年）だった。すると、本作はその焼き直し・・・？同じテーマなら、本作の特徴は？ポイントは？

折りしも日本では、ジャニーズ事務所のジャニー喜多川氏による元アイドルへの性加害事件が大問題になっているが、本作に見るコロニア・ディグニダの創設者パウルはその１００倍、１０００倍の凶悪さを見せつけてくれる。少し胸クソが悪くなるかもしれないが、本作ではそれに注目し、あらためて“コロニア・ディグニダ”の問題点を確認したい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

◆本作の邦題を見て、「コロニア」とはどこかで聞いたことのある名前だと思い記憶をたどっていくと、ドイツ、ルクセンブルク、フランス映画『コロニア』（１５年）（『シネマ３８』１６１頁）にたどり着いた。

同作のチラシには、「一度でも足を踏み入れたら、脱出不能」「そこは、残党ナチスの巣窟　極秘要塞」「必ず、私が、救い出す。」「生還率０．０１％！<驚愕の史実>に基づく、緊迫の脱出劇」の文字が躍っていたが、同作で観た「コロニア・ディグニダ」は何とも恐ろしい施設だった。その詳細は、ウィキペディアを見れば詳しくわかるはずだ。

◆私は『コロニア』の“みどころ”で、次の通り書いた。

「コロニア」って一体ナニ？それは脱出不能、生還率０．０１％の残党ナチスの極秘要塞。なぜ、そんなものがチリに？アジェンデ人民連合政府を１９７３年９月の軍事クーデター

で倒したピノチェト政権とコロニアとの関係は？そんな「驚愕の史実に基づく緊迫の脱出劇」を、『ハリー・ポッター』シリーズの子役から大きく成長（成熟？）したエマ・ワトソンが大熱演！脱出劇の多少の粗さや甘さは無視し、歴史的な問題点をしっかり直視したい。

◆その上で、私は①「コロニア」って一体ナニ？、②「コロニア・ディグニダ」の実態は？、③１９７３年９月、サンティアゴで軍事クーデター発生！、④潜入したヒロインの活躍ぶりに注目！、⑤脱出成功までのプロセスは？その見せどころは？、⑤脱出成功！ところがその後も意外な展開が！、の小見出しで詳しく同作を評論した。

同作に私の大好きなイギリス人女優、エマ・ワトソンが主演していたのは意外だったが、とにかく、同作の問題提起の鋭さに驚くとともに、自分の無知さについて恥じ入らざるをえない映画だった。

◆『コロニア』を観て「コロニア・ディグニダ」の実態を知ってしまうと、本作のチラシに躍っている「洗脳、独裁、拷問、虐待――　ナチス残党が築いたカルト」「１９８９年、チリ。ピノチェト政権下で隠され続けた歴史を、少年のまなざしが静かに暴き出す」「そこは、邪悪が支配する楽園」は、「何だ、同じテーマの蒸し返しか？」とつい思ってしまう。

しかし、同時にチラシには「隔離された悪夢の中で、少年は大人になる」「知られざるチリの負の歴史。悪名高き＜実話＞」と書かれている。さらに、合唱団に入っていた小学生の時の私が憧れたウィーン少年合唱団を思わせる（？）、本作の主人公の少年をはじめ、６人の少年たちの姿が写っているので、やっぱり、こりゃ必見！

◆本作の物語は、奨学生としてコロニア・ディグニダの学校に通い始めた１２歳の少年パブロ（サルヴァドール・インスンザ）が、入学してすぐに集団を統治するパウル様（ハンス・ジシュラー）の“お気に入り”に選ばれるところから始まる。しかして、本作のテーマは「それは彼にとって地獄の日々への入り口だった。地域から隔離された謎の施設で遭遇する、あまりに不可解な出来事の数々。闇に触れた少年は、どのように現実と対峙するのか―。」になっていく。

ちなみに、近時の日本では、ジャニーズ事務所のジャニー喜多川氏による少年への性加害事件が話題になっている。本作に見るパウルは、さしずめこのジャニー喜多川氏を１００倍、１０００倍凶悪化した“変態じいさん”だ。本作を観ているとそれがよくわかってくるが、逆に言えば、本作が描くのはそればかり・・・？

◆１９５０～６０年代にかけて「北朝鮮は楽園の国」という大宣伝（虚偽宣伝？）が大展開された日本では、北朝鮮への帰還事業が何度も実施された。吉永小百合の出世作になった浦山桐郎監督の名作、『キューポラのある街』（６２年）でも、その帰還事業が前向きに

描かれていた。
　ピノチェト率いる軍事政権の終末期にある１９９０年代前半のチリで、元ナチス党員でアドルフ・ヒトラーを崇拝し、子供に対する性的虐待でドイツを追われたキリスト教バプテスト派の指導者、パウル・シェーファーが設立した「コロニア・ディグニダ」や、そこに設立された“寄宿学校”は、その当時の北朝鮮と同じく“楽園のようなコミュニティ”と考えられていたらしい。当然、パブロもその１人だったから、“スプリンター”と呼ばれるパウルの“お気に入り集団”に選ばれると大喜び。しかし、同じスプリンターだったパブロと同室の少年ルドルフの異常に怯えた態度に接していると、次第に・・・。

◆本作では、施設内で規律違反を犯した者たちへの容赦のない処罰風景が次々と描かれるので、かなり気分が悪くなってくる。さらに本作では、子供たちだけでなく、多くの職員、監視員、看護婦たちもパウルのカリスマ性にハマっている（騙されている？）ようだから、それが不気味だ。
　その象徴が、互いに愛し合いながら子供を作る方法を知らない一組の男女が、動物の交尾に関する書物を読んで人間の男女のセックスを学習し、その実践をするシークエンス。これが２０世紀の現実とはとても思えないが、「コロニア・ディグニダ」では現実にこんな風景があったそうだからビックリ！

◆『コロニア』（１５年）の基本ストーリーは、エマ・ワトソン扮するヒロインが「コロニア・ディグニダ」に潜入し、そこに収容されてしまった恋人を救い出すというものだった。それに対して、本作の主人公である１２歳の少年パブロは、親の希望で施設に入り、パウルからもスプリンターに選ばれた、「コロニア・ディグニダ」内のいわば“エリート少年”。しかるに、本作ラストは、そんなパブロが命がけでルドルフと共に施設を脱出するストーリーになっていく。しかして、それはなぜ？本作では、それをしっかり考えたい。
　さらに本作では、ほぼ全編にわたって「コロニア・ディグニダ」のひどい実態が描かれるので、それをしっかり確認したい。もっとも、９９分間ずっとそればかり見ていると、私はいい加減気分が悪くなってきたが・・・。

２０２３（令和5）年6月１５日記